

2021年7月

東京オリンピック本番

今回は、大会に向けての準備、出国検疫、輸送、そして会場到着後の様子について紹介しました。細心の注意を払って日々を過ごし、会場入厩後のトレーニングでも好調をキープすることができ、本番への準備が整いました。

競技

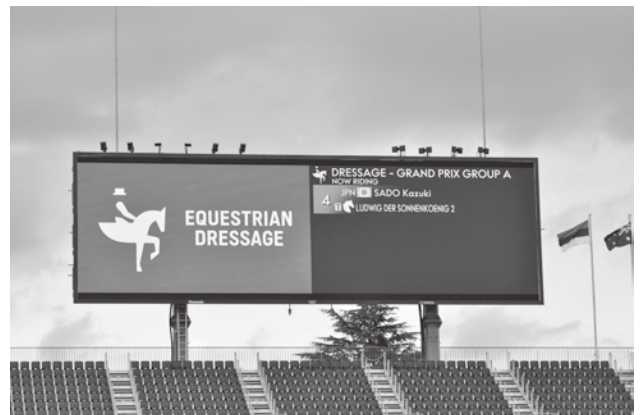
7月24日。前日のホースインスペクションも問題なく通過し、長い準備期間を経ていよいよ競技当日を迎えました。私の番は17時30分ごろと、まだ暑さの残る時間帯でした。前日までのトレーニングでよい手応えを感じられていたので、準備運動時間は少し短めの40分として、短い時間で準備が整うように努めました。

ここからは、演技中に私が感じたことを振り返ります。入場・停止はトレーニング通りしっかり停止ができました。しかし、伸長歩前の隅角で1歩イレギュラーステップを感じました。伸長歩自体は非常に良かったのですが、ハーフパスに入る前に再度イレギュラーステップを感じて、この時点で何かがおかしいことを感じました。ハーフパスではイレギュラーになりやすいため、慎重に騎乗しましたが左ハーフパスでは完全に抑えることができませんでした。停止・後退は、クリアな5歩ではありませんでしたが、以前のような大きなミスは避けられました。次の伸長歩ではイレギュラーにならないように気を付けつつもできる限り行けるようにしましたが、1回目よりは伸びませんでした。パッサージュ・ピアッフェでは馬を確実に自分の前に出しておかなければならないためイレギュラーを気にせず攻めて騎乗しました。結果として、パッサージュで1歩外す場面がありましたが、ピアッフェも正しいステップで行うことができ、良い流れで実施することができました。伸長歩と収縮歩は普段通りできていました。常歩からパッサージュ・ピアッフェへの一連の流れは馬が得意とするところなので馬を信用していききましたが、1回目より多くのイレギュラーを感じました。駈歩発進もトレーニング通りでき、以前のように反抗せずに行えました。ここまでに多くのポイントを落していると感じていたため、ここからはさらに集中するように気を引き締めました。2歩毎は、非常に良いバランスでこの馬なりに真っ直ぐであったので、ミスする気配がありませんでした。伸長歩ではやや馬の疲労が感じられましたが、頑張

って動いてもらうかありま



▲非常にうまくいった前半の伸長歩



せんでした。脚で馬を鼓舞するように動かしていきました。ジグザグでは最後の変換で大きなミスをしてしまいましたが、それは私のミスでした。最後の6歩目での変換で十分に準備ができていなかったことが原因なのですが、頭ではしっかりとカウントしていたのですが、体が7歩目で変換する状態になっており、3歩目あたりでそれを感じた時点で対応できずミスしてしまいました。言い訳になってしまいますが、このような現象は馬場馬術をしていれば多くの人がするミスで、特に4歩毎や3歩毎の踏歩変換などで、歩数を数える頭と準備をする体のリズムが合わないときがあります。今回はまさにその状態でどうしようもありませんでした。ただし、このミスを歩毎に引きずらないようにすぐに頭を切り替えて駈歩の修正に最大に集中しました。そのおかげでとりあえずここではミスなく行うことができました。ただ、この踏ん張りが馬にとっては最後のパワーだったのかもしれない。ピルエットでは、左右とも今までと全く違う反応で駈歩を持続できていませんでした。特に右ピルエットは後肢が変わってしまったこともあり2点をつけたジャッジもありました。最後の中央線でのパッサージュも多くのイレギュラーを感じ、ピアッフェもしっかり後ろに乗れる状況ではありませんでした。このように、ほぼすべての局面で何かしらのミスがあり、ジグザグと特にピルエットで大きく失点し、過去最低の62%という成績になってしまいました。

競技終了直後は、様々なイレギュラーについては馬をスルーしきれていなかったために起こったことだと思い、ピルエットも自分の感覚が未熟だったのかと落ち込みましたが、ビデオで見直してみるとスルーできていない体勢ではありませんでした。トレーナーのImkeも同意見で、「今までにはないイレギュラーの仕方、スルーしていないときに起こるイレギュラーではなかったため、おそらくどこかで肢を痛めたか、体を痛めたのではないか」という見解でした。翌日、早速獣医師に見せてチェックしましたが、特に問題と見られる箇所はなく、「おそらく暑さが一番の原因で、運動中の疲労のピークが競技の時に来てしまい、普段通りに踏ん張ることができなかったのではないか」とのことでした。私にとってもImkeにとってもこれが最も納得できる理由でした。

考察と対策

では、どうすればこのような状態にならなかったのか？そこをよく考察する必要があります。色々なことを考えて、まず原因の一つとして、準備運動での最後の10分間に問題があったと思います。最終ウォームアップアリーナに入った時にまだパッサージュを行なっていなかったため、ここで最終確認する必要がありました。ここで馬は普段通りにホットになってきてスルーすることを拒み、それを解決する時間が普段よりも少し長くなってしまいました。ほんの2分ほどだったと思いますが、ここで人馬ともかなりパワーを使ってぶつかり合ったので、この時に体力を消耗しきった可能性が高いと思います。また、パッサージュを行なっていなかったことで人間に焦りが生じたのも自分で感じていました。そこでの切り替えを1分でも早くしていたら違っていたかもしれません。それ以外の準備運動では、普段の競技前と同様でした。駈歩区間は、全てトレーニングの修正通りでできていて、普段通り絶好調であることを感じていました。



▲積極的に乗っていったパッサージュ

そして、もし次に同じようなシチュエーションになったらここを改善すべきと感じた点は、東京に着いてからのケアでした。東京へ出発する直前に獣医師にケアしてもらっていたので、これで10日間ならもつだろうと思っていたことが甘かったのかもしれませんが、それは、競技が終わってから戸本一真選手のヴィンシーを担当しているグルームの働く姿を見て感じました。彼女は馬の様子を見て自分でエサの量を調整したりケアをしていますが、今回は特に毎日のようにFEIから来ている整体師のようなセラピストを呼んでヴィンシーのケアをさせていました。これを見て、たとえ健康な馬でもオリンピックという大舞



▲競技直後にはメディアが待つミックスゾーンを通過して取材を受けます

台で最大限のパフォーマンスを発揮させるためには、このようなケアを怠らざるを得る全てのことをしておくことが万全の準備だと感じました。私はこの手のケアは普段からかなり慎重に行なっていますが、東京での最後の10日間については「普段通りの感覚で10日なら大丈夫」と高をくくっていた気がします。そうではなく、気候も環境も違えば長距離輸送もあり、オリンピックという騎乗者や周りの人にとっても普段と違うプレッシャーがある環境と考えれば、馬にとっては最も疲れやすい環境だったと思います。そう考えると、どれだけ馬が絶好調であっても、この10日間の中でももしかしたら身体のケアを依頼するべきであったと思います。気付くのが遅かったですが、これも自ら身をもって経験して学んだことなので、大事な財産だと思います。

会場に入ってからトレーニングがハード過ぎた、馬がホット過ぎたという見方もあったようですが、そこに原因はありません。トレーナーとはしっかり話し合い、トレーニングもトータルすると普段より抑えて行いました。入場時に馬がホットに見えたかもしれませんが、それはこの馬にとってしっかりスルーして収縮しておくための大事なエネルギーです。

まとめ

今回「馬事公苑」という私の職場が見事にオリンピック会場となり、そこで選手として演技できたことは改めて特別な経験であったと感じました。これまでも大きな舞台での競技は経験していましたが、今回はやはり地元であり、ホームであることを感じました。

それはJRAというチームがこのオリンピック馬術競技の土台をしっかり支えていたからです。会場がJRAの施設であることはもちろん、馬術系はもとより、事務職、獣医職、装蹄職などさまざまな職種のJRA職員が多くのポジションで業務にあたっているのを見て、各人のオリンピックに対する熱意を強く感じました。この熱意がなければオリンピックの成功はなかったのだと思います。多くの選手や役員から会場を称えられ、オーガナイズを称えられたことはJRA職員が持つ「馬のために全力を尽くすチカラ」による結果だと思いました。その一員として、選手として参加できたことをとても光栄に思います。世界の馬術界が驚く、素晴らしい競技会でした。

そして、このような競技会の成功も全ては「競馬」の売り上げがあり、それを開催するJRAが根本としてあるからこそです。このオリンピックも競馬なしでは成し得なかったこと考えると、競馬の持つ魅力やパワーには改めて感服します。そして、当たり前のことですが、これからも馬術を通して微力であっても競馬の発展に還元しなければならないと強く感じました。今後も引き続きJRA職員としての自覚を持って、業務や馬術の活動に取り組んでいきたいと思っています。

《佐渡一毅のドレッサージュトレニング》vol.1から最新までの全てを、JRA馬事公苑のホームページに掲載しています。ぜひご覧ください。